オヤニラミ

五年　武井　有汗

「久しぶりー、アリンコ。相変わらず小さいな。」

懐かしいコウちゃんの声が耳に飛びこんできて、思わず私はにやけてしまう。いよいよ、一年で一番楽しみにしている冒険キャンプが始まった。いつもだったら、山に入って竹を切り出し、自分用の箸とコップを削り出すところからのスタートだ。滝を目指す沢登りや激流下り、トレッキングにカヌーに昆虫採集に……。家族と離れて丸々一週間、大自然の中でキャンプをしながら遊び尽くす。今年は、新型コロナウイルスの影響で二泊三日に短縮され、参加者もいつもの半分以下だ。日数が短いのでカヌーと川遊びだけのキャンプになってしまったが、それでも、近県では大雨による災害が起きている中で、幸いにもこの地域は被害が少なく、なんとか開催が決まった。都会育ちの両親は、こんな経験ができてうら

やましいと、毎年申しこんでくれる。しかも、今年は子供九人に対して、大人のスタッフが六人もいて、「ありがたいことだね」と驚いていた。

ここでは、自分でキャンプネームを決めて呼び合う。私は体が小さく、名前の響きとも似ているので、初めて参加した年から「アリンコ」だ。コウちゃんは、私が大好きなスタッフで、魚捕りの名人。去年はウナギやナマズを捕ってくれた。今年はどんな魚に会えるのか、今からわくわくする。

河原にテントを張り、みんなで昼食を作って食べ終えると、早速カヌーの準備だ。太陽が頭の真上からジリジリと照り付けてくる。女子は三人だけなので、すぐに打ち解けた。急いで水着に着がえようとするが、汗でまとわりついてしまう。お互いに服を引っ張り合いながら、やっとの思いで着がえてテントの外に出ると、男の子が携帯電話でしゃべっていた。確かに同い年で、しかもレンという名前だった。

気がする。こんな時にどこに電話をしているのだろうか。不思議に思って見ていたらそっぽを向かれたので、そのまま川に走っていって水に飛びこんだ。ここは、水質日本一とも言われる川、ガラスのように透き通った水に足をつけているだけで、くすぐったいほどに小魚が寄って来る。

「さあ、みんなカヌーとヘルメットを選んで。ユウとアリンコはそっちのやつね。どうせ勝手に動きまわりたいんやろ。」

コウちゃんがにやっとしてこちらを見た。いくつも並んだ大きくて安定の良いカヌーの中に、小型のものが二そうある。ユウは、毎年キャンプで会う、ひとつ年上の男の子だ。お父さんがカヌーのインストラクターで、このキャンプのスタッフもしている。ユウも私もカヌーが得意なので、小型の方が楽しめるだろうと、用意してくれていた。スタッフみんなに認められているようで、うれしい。

一年ぶりにカヌーに乗りこみ、操作の感覚

を思い出すと、私はゆっくりと漕ぎ出した。
山に囲まれながら、水で冷やされた風を受けて進むのは、最高に心地良い。少し身を乗り出して下を見ると、アユが泳ぎ回り、ハゼやカマツカが岩にくっ付いているのが、くっきりと分かる。たまに、魚と競争しようと力いっぱいパドルを回してみるが、全く追いつくことができなかった。
「アリンコ、アリンコ」。
後ろから、ひそひそ声が聞こえた。振り向くと、ユウが唇の前に人差し指を立て、あごで、前を行くコウちゃんを指す。私は、ユウのやりたいことがすぐに分かって、ユウの横に並ぶよう、カヌーを回した。そこから三人で一気にスピードを上げる。静かに、なるべく音をたてないように。前のカヌーに追いつくと、私達は顔を見合わせ、パドルで同時に水をすくい上げた。
「バシャン！」
たくさんの水しぶきが、コウちゃんの背中に

命中した。

「うひゃあ、冷てーし！　こら、お前らやったなあ！」

「あはは、大成功！　キャー、コウちゃんやめてー」。

仕返しにコウちゃんも、ジャバジャバと水をかけてくる。休けい場所に着いた時には、三人ともびしょぬれになり、カヌーの中には水がたまりができていた。

みんなは先に到着していて、がけから飛びこみを始めていた。カメラを持った男の子が、河原から写真を撮っている。レンだった。

「飛びこみ、やらんと？」

ユウが声をかけたが、レンは小さく首を横にふり、離れていってしまった。

「なんや、あいつ」。

変なの、と思ったが、私達はがけをよじ登り、すぐに飛びこみに夢中になった。

力ヌーを終え、テントを張った河原に戻ると、お風呂とタ食の準備だ。川の水をバケツ

りレーでドラム缶に入れ、下から薪を燃やし、温まったところで木の板を沈めながらお湯に浸かる。ドラム缶五右衛門風呂は温度調節が難しいので、熱すぎたりぬるすぎたり、いつも順番争いで大笑いだ。今日は女子はなかなかいい温度で入れたので、おしゃべりをしながら夕食の準備を進めていると、携帯電話の着信音が聞こえてきた。風呂から出たばかりのしんだ。またか。その後も、なかなかレンはテントから出てこない。やっと出てきたかと思えば、カメラでそこら中の写真を撮り始めた。見かねたスタッフが、「レン、準備手伝えよー、写真ならスタッフも撮ってるぞ。」と注意をしたが、「はーい。」とは答えたものの、ずっとカメラをにぎったままだった。

翌日も朝から自炊をし、お昼用に特大サイズのおにぎりも作って、カヌーで川を下った。昼間はとても暑いので、川の浅いところに座

りこんでおにぎりほおばる。ただのおにぎりなのに、外で食べるとびっくりするほど美味しく感じるのは、なぜだろう。

お腹がいっぱいになって、一息ついていると、手に網を持ったユウがやってきた。

「アリンコ、エビ捕り行こうや」。

「オーケー。行こうや、行こうや!」

私とユウのコンビで、去年はたくさんのテナガエビを捕まえたのだ。まずは、潜ってエビを探す。だいたい、大きめの石や岩の間にいる。見つけると、ユウはそーっとエビの後ろにまわり、網を構える。そこで私の出番だ。潜ってエビに近づき、さっと正面に手を置く。すると、エビは驚いて後ろに跳ねるので、ユウが構えている網にぴょんと入ってしまうのだ。

「やったね!」

今年も順調だ。私達の間で、小さいエビは逃がすと決めている。いつもスタッフから、生き物を大切にし、この豊かな川を守っていく

というこを教わっているからだ。

十五センチ以上あるエビが何匹も捕れたので、ユウは他の魚を探しに出かけていった。

私はもっと川の中を見ていたかったので、シュノーケルでゆっくりと泳ぐ。岩の上でじっとしている魚もいれば、スピードを出して泳ぐ魚、のんびりと泳ぐ魚もいて、色々だ。太陽の光が透明な水に差しこみ、キラキラと輝く。あまりにも気持ちが良くて、私も魚になった気分だ。

そろそろ岸に上がろうと浅いところに戻った瞬間、目の前にアユの群れが来た。アユは白いお腹を目立たせるために、体をひらひらとくねらせて泳ぐ。光が反射して、下にいる敵の目をくらませるためだと言われているが、その姿は本当に綺麗だ。思わず両手を伸ばして勢いよく立ち上がると、なんと手の中に一匹のアユが！　つかめてしまった！

滑らないように尾びれをギュッとつかみ、急いで岸に上がって七輪があるところまで走

「た。ちょうどコウちゃんがエビを焼いている。

「見て！　アユ捕れちゃった、よ！」

興奮してコウちゃんに見せると、

「すげーな。アリンコ、つかみどりかよ！」

と笑われた。アユにありがとうを言ってから七輪に乗せ、焼いてむしゃむしゃと食べた。いい香りがする。私はアユが大好きだ。川の恵みをしっかりと味わった。

少しすると、ユウが網を下げて戻ってきた。

「コウちゃん、これが網にかかったちゃけど。なんやと？」

網の中には、十センチぐらいの、ひれがとげとげした魚がいた。黒っぽい体で、エラぶたに目のような模様がある。

「あー、それ、オヤニラミやろ」。

「オヤニラミ？」

「うん。攻撃的な性格で、卵や稚魚を守るために、親は見張っていて、寄ってきた敵を追いはらうとよ。親がにらみをきかせて子

供を守るから、オヤニラミ。外来種ではないけれど、この川には元々いないなかったはずやとよね。たぶん、誰かが他の川から持ちこんだっちゃかー。

「そうやっちゃ。ここにいちゃダメなやつやったっちゃ。

ユウはちょっとガッカリした様子だ。

「よし、二人ともついて来い。今年も、そろそろ本気を出すぞ。」

そう言うと、コウちゃんは、もりを片手にずんずん川に入っていった。私達も慌てて後を追う。コウちゃんは、ぐんぐん泳いで、少し深場に来た。深さは四、五メートルだろうか。確実に大物狙いだ。少し潜って岩を動かすと、四十センチ以上はありそうな巨大イダが数匹出てきた。でも、コウちゃんの目的は違うらしい。目を凝らしながら少しずつ場所を移動していると、

「いた！　よく見てごらん。」

と小さな声で言われた。岩の間に、黒くて大

きな魚がうずくまっていた。あのヒゲは…。
「ナマズ発見！　ちょっと待ってな。」
コウちゃんは、大きく息を吸いこむと、静かに川底へと潜っていく。私とユウは、緊張しながらコウちゃんを見守る。次の瞬間、
「ズサッ。」
と勢いよくもりが突きささった。お見事！
腹をやられたナマズは、ぐるぐるともりに巻きついた。
「捕ったぜ！。」
やっぱりこうちゃんは名人だ。岸に戻ると、みんなが集まってきた。
「すげー、ナマズだ！　初めて見た。」
「見て！　心臓がピクピク動いているよ。」
「本当にヒゲがある！　長いな。」
今年初めてキャンプに参加した友達は、珍しそうにナマズを見ている。
「レンもこっちに来たら？」
ちょっと離れたところからカメラを構えていたレンに声をかけてみた。でも、やっぱりレ

ンは私を無視して、逃げるように向こうに行ってしまった。

「さぁ、準備ができたぞ。去年は焼いたから、今年はくんせいにしようや！」

コウちゃんの声がした方を見ると、大きな石を積んで焼き網を置いたかまどがあり、その上に煙がにげないように竹から切り落とした緑色の枝葉がこんもりと乗っていた。薪を燃やして、本当にナマズのくんせいを作った。白い身はほろほろとしていて、たまらなく美味しかった。

二泊三日なんて、本当にあっという間だ。もっともっと、川にいたい。みんなで過ごしたい。楽しい時間は、わざと早く流れて行ってしまうようで悲しい。最終日、夕方になるとテントをたたみ、河原のゴミを捨てた。毎年、驚くほどゴミが集まる。こんなに綺麗な川で過ごせば、どう考えてもゴミなんて捨てていく気にはなれないのに。黙々と拾っていると、レンがまたカメラをいじっているのが

見えた。「ゴミ拾いぐらいしようよ」と言いたかったが、もう話しかける気にはならなかった。寒いから、汚れるから、危ないから、と言って、結局レンは三日間ほとんど川に入らず、河原やテントの中で過ごしていた。私には、レンの気持ちがちっとも分からなかった。

悲しい気持ちのまま解散場所へ移動すると、すでに車が一台停まっていた。中から女の人が駆け出して来た。

「レン君、大丈夫だった？　けがはない？」

レンのお母さんだった。レンは自分の荷物をお母さんに渡すと、みんなとバイバイもしないうちに車に乗せられ、走り去っていった。

私は唖然としてしまった。去年も一昨年も、キャンプの最後は一週間過ごした仲間と別れ難く、日焼けした真っ赤な顔で、お互いに声をかけ合う。上級生から「よく頑張ったなアリンコ、来年もまた来いよ！」と言われると、なんだか胸が熱くなって、その言葉を思い出

しては、次の夏休みを待ち遠しく思ってきたのだ。しかし、レンはそんな感動も何もなく、キャンプを終えてしまった。

「あいつ、かわいそうやな。」

となりにいたコウちゃんが、小さな声でつぶやいた。

「朝昼晩とお母さんから電話がかかってきて、何をしているか聞かれちょった。食べたものから身の回り全てをあのカメラで写真に撮って来るように言われちょったとよ。」

私は驚いてコウちゃんの顔を見上げた。だから電話をしたり、ずっとカメラを手放さなかったりしたのか。私だったら窮屈でたえられない。第一そんなことを言われたって守らないだろうけれど。口うるさい親から離れて、のびのび過ごせるのが、このキャンプのみ力でもあるのに。でも、レンは親とは離れても電話でしばられていた。従うことが当たり前のようだった。

ふと、あの魚のことを思い出した。

オヤニラミだ。

親が常に子供を見張り、寄って来る危険を追いはらう魚。本来この川には、いるべきではない魚。

あの携帯電話と力メラは、川にあるべきではなかった。レンは常に見張られ、寒さや汚れや危険から遠ざけられていたのだ。

「いつもみたいに一週間あれば、もうちょっと解放してやれたかもしれないっちゃけどなあ。」

コウちゃんは残念そうだった。そうかもしれない、このキャンプに申しこんだくらいだから、本当はもっと自由に遊びたかったのかもしれない。

レンは帰ってしまったけれど、他の友達とは声をかけ合って、やはりまだ帰りたくないなと思いながらお迎えを待った。ユウはもう六年生、来年は参加するのだろうか。

「またな、アリンコ。」

「またね、ユウ。」

「アリンコんち、お迎え遅いね。忘れられてる」ちゃない？」

スタッフは笑うが、私は内心あり得るとヒヤヒヤしていた。うちの車が解散場所に入ってきたのは、結局一番最後だった。とっくに指定された時間を過ぎている。

「あれ？　もしかして時間、間違えてた？」

お母さんは慌てて車から降り、スタッフに挨拶に行く。

「今年もお世話になりました！　遅れてすみません。」

やはり間違えていたのか。私もみんなに謝ると、こうちゃんは笑って言った。

「それぐらいの方が、気楽でいいやろ。アリンコ、もっと大きくなれよ！　また来年会おうな！」

「そうだね。コウちゃん、今年も楽しかった。ありがとう！」

この大自然に、スタッフに、仲間に、心から感謝の気持ちがあふれ出てくる。

「ごめんねー、すっかり勘違いしてたよ。
「もう、お母さん、みんなに笑われてたよ。
そういえばうちと違って、今年はものすごく子供を心配している母さんがいたよ。」
帰りの車の中で、私はレンの話をした。黙って聞いていたお母さんは、
「せっかくの体験なのにもったいないわね。」
と言った。
「お母さんは連絡しなくても心配じゃない？」
「あはは、もちろんどうしているのか気にはなるけれど、スタッフさん達を信頼しているからね。絶対に楽しんでいるだろうと想像がつくし。何より帰ってきてからあなたの止まらない話を聞くだけで、十分安心よ。それとも、たくさん電話した方がいい？」
私は慌てて首を横に振る。
「絶対にいや。せっかくの自由なのに。」
「でしょ？　さあ、自由な時間は終わりよ。ガミガミ言うお母さんとの現実に戻ってきたね。」

と大笑いをした。車の窓から景色を眺め、現実に戻ったのを実感する。

レンは少しだけでも、自由な気分を味わえただろうか。レン、来年は来るかな。もし会えたら、エビ捕りに誘ってみよう。また無視されるかもしれないけれど。

「またね、レン。」